

# 学術調査報告書

2008年 4月30日

(フリガナ)	スミ タケオ	入学年度	2005年度
申請者名	住 岳夫	学年	博士後期3年

研究題目	イタロ・カルヴィーノ研究 ——20世紀イタリア文学についての都市論的考察
主任指導教員	和田 忠彦

## (1) 学術調査の目的

20世紀イタリアの作家、イタロ・カルヴィーノ Italo Calvino(1923-85)が残した資料、ならびにカルヴィーノ研究を進めていくうえで必要な文献をイタリアの図書館で収集し、博士論文「イタロ・カルヴィーノ研究」に文献学的な発見と裏付けを反映させることが、今回の学術調査の目的である。調査対象はイタリア国内でなければ閲覧・入手できない資料を中心とする。具体的には、①作家本人が受けたインタビュー約50点(モンドドーリ版の『全集』には未収録)、②カルヴィーノ文学に広義の都市論的観点から(風景論、空間論、地理学も含めて)アプローチしている研究論文の2種類を重点的に収集する。

また、資料調査とはべつに、リグリア州サンレモにて現地調査もおこなう。サンレモはカルヴィーノの故郷で、幼年時代から約20年の歳月を過ごした町である。現地調査をおこなうのは、サンレモの風景が作家の精神のありようや世界認識のありかたにおよぼした影響を、実際に肌で感じ見極めるためである。

カルヴィーノの文学を、綿密な書誌的調査と具体的な実地調査にもとづき、都市論的観点から本格的に研究した例は日本にはまだない。今回の学術調査の意義もその点にもとめられる。

## (2) 調査実施地および期間

1、パヴィア大学附属図書館

Biblioteca Universitaria di Pavia

Corso Strada Nuova 65, 27100 Pavia

期間：2月13日～15日

## 2、サンレモ市立図書館

Biblioteca Civica di Sanremo

Via Carli 1, 18038 Sanremo

期間：2月18日～20日

(この3日間でサンレモの現地調査も行う)

## 3、トリノ市立中央図書館

Biblioteca Civica Centrale di Torino

Via della Cittadella 5, Torino 10122 Torino

期間：2月21日～27日

### (3) 学術調査の具体的な実施内容

#### 1、パヴィア大学附属図書館

中規模の図書館であるが、おおきな特徴は「近現代作家の手稿資料研究センター」*Centro di ricerca sulla tradizione manoscritta di autori moderni e contemporanei* が併設されている点にある。当機関は国内有数の手稿資料センターとして知られ、20世紀イタリアの詩人・作家の直筆原稿を多数擁しており、資料によっては一般公開もしている。

オンラインの所蔵目録によると、中編小説『遠ざかる家』*La speculazione edilizia* の手稿(1963年版)のほか、カルヴィーノ直筆の書簡も複数所蔵されているようである。現在、閲覧のゆるされるカルヴィーノの数少ない手稿資料であるため、たいへん興味ぶかい。あらかじめ予約申請をしたのだが、「期間中、責任者不在」という理由で、残念ながら閲覧することはかなわなかった。絵画やグラフィックデザインにも喩えられるカルヴィーノの筆跡を調査の対象とするのはべつの機会に譲りたい。

大学附属図書館では、カルヴィーノのインタビュー資料を中心に閲覧と複写の許可を申し出た。パヴィアに滞在した3日間は、あいにく図書館の臨時閉鎖(理由は設備点検、あるいは責任者不在)と重なり、期待していた資料の多くは集められなかった(ここで入手できなかった資料はその後トリノで収集する)。ただ、海外から調査で来ている旨を担当者に伝えたところ、新聞や雑誌など大型資料にかぎり特別にその場でコピーしてくれた(通常は、申請後、1週間待たなければならない)。

ジェノヴァ、サンレモと、リグリア地方に向けて出発する前に、ジョルジョ・ベルトーネの『文学と風景』(Giorgio Bertone, *Letteratura e paesaggio*, Pietro manni, Lecce 2001)を閲覧できたのは幸運だった。第1章「リグリア文学と風景」*La letteratura ligure e il paesaggio*と題された論考は、リグリアに特有の地理的・文化的条件がこの地の詩人や作家におよぼした影響について、興味ぶかい指摘を多くふくんでいる。たとえば、リグリアの詩人(エウジェニオ・モンターレ Eugenio Montale が例に挙げられる)の風景描写は、「上から見た」海のイメージや、「跳ねる」、「跳ぶ」といった動詞の多用など、垂直運動にもとづくという指摘。この論考に啓発されて、しばしば論じられるモンターレの詩作品との関係、その風景描写から受けた影響が、カルヴィーノ文学の本質的な部分に深く関わっているのではないかと考えるようになった。風景の「垂直性」がカルヴィーノ文学にとってどこまで妥当といえる特徴なのか、後日、サンレモの現地調査で実際に確かめることにする。

## 2、サンレモ市立図書館(およびサンレモ市内の現地調査)

地方都市の小規模の図書館である。ここではおもに、サンレモの郷土史家の著作を参照し、カルヴィーノ文学に縁の深い土地の背景について調べた。具体的には、長篇第一作『くもの巣の小道』*Il sentiero dei nidi di ragno*(1947)の舞台となるサンレモ旧市街について、また『遠ざかる家』*La speculazione edilizia*(1957)の題名にもなっている50年代のリグリア地方の「建築投機」についてである。

この図書館にはカルヴィーノ家から寄贈された「カルヴィーノ文庫」Fondo Calvino が存在し、資料整理が完了した段階で、早ければ2008年夏以降に一般公開がはじまるという情報を得ることもできた。

つづいてサンレモの現地調査について報告する。3日間、あいにく悪天候に見舞われたが、2日目の夕方、雨が小やみになったのを見はからい、カルヴィーノゆかりの地を探訪することにした。市街地図を買いもとめ古書店で情報を得てから、まずはサン・ピエトロの丘へと向かう。カルヴィーノが少年時代を過ごした家、通称「ヴィッラ・メリディアーナ」は、かつてこの丘の中腹に存在した。現在は、入り口の門扉だけが残り、テラスつきの屋敷も広大な庭園も、殺風景な駐車場と集合住宅とに取って代わられている。いわゆる「建築投機」以降のサンレモと、カルヴィーノ作品に描かれる20〜30年代のサンレモを、同一の町のイメージとして重ねあわせるのは予想していた以上に困難だった。サンレモを訪れる直

前に参照した、ルカ・バラネッリ、エルネスト・フェッレロ編『アルバム・カルヴィーノ』(*Album Calvino*, a cura di Luca Barnelli ed Ernesto Ferrero, Mondadori, Milano 1995)と、パオラ・フォルネリス、ロレッタ・マルキ編『カルヴィーノ家の秘密の庭』(Paola Forneris ed Loretta Marchi, *Il giardino segreto dei Calvino*, De Ferrari & Devega S.r.l., Genova 2004)に見られる、戦前のサンレモの田園的イメージが脳裏に焼きついていたからかもしれない。「上から見下ろした」サンレモの町、かなたに見える一本の水平線——かつてカルヴィーノが目にした風景の前に、いまは戦後に開発された灰色の高層住宅が立ちはだかっている。

サン・ピエトロの丘から市街地へとくだり、旧市街、通称「ラ・ピーニャ」*La Pigna* (イタリア語で「松かさ」の意)をめざして歩く。途中、新市街の中心に位置するコロンブス広場を横切るが、ここにもカルヴィーノが親しんだ往時の「街」の面影は薄い。ヴァカンスにおとずれる観光客のためのホテル、ペンション、レストラン、土産物屋が軒を連ね、市街地の東のはずれにはリゾート地サンレモの象徴ともいえるカジノがある。幾度かインタビューで答えているように、カルヴィーノは故郷のこうした観光地化をほとんど恥じており、みずからの作品世界からは自覚的に排除しつづけた(したがって『建築投機』のように「観光ブーム」に沸くサンレモをあえて記述の対象としたのは例外的な試みだったといえる)。

さて、いよいよ旧市街が見えてくる。市街地からこちら側へ足を踏み入れたとたん、さきほどまでの喧噪がパタリとやむ。くねくねと曲がる細い路地、昼間でも薄暗い坂道の両脇には、土地の人びとが代々暮らしてきた家並が立て込んでいる。旧市街「ラ・ピーニャ」は文字どおり「松かさ」のような構造をしており、ひとはその鱗片と鱗片のわずかな隙間の底を行き来する。街路はあくまで狭く細く、壁とトンネルとアーチが四方からせまってくるようだ。目の前の風景がしだいに小説『くもの巣の小道』(1947)の印象的な書き出しに重なりはじめる。

「路地の底までとどくには、日光は冷たい壁をかすめてまっすぐにおりて来なければならない。でも、その壁ときたら、青い青い一すじの空をいくつにも区切るアーチのおかげで、やっとならぬと離れて立っていられるという代物なのだ。日光はまっすぐにおりて来て、壁のあちこちに不ぞろいにならんでいる窓をつたい、その窓先の古鍋に植えためぼうきやオリガンや、紐につるして干してある下着やらのあいだを搔いくぐってゆく」

(米川良夫訳、ちくま文庫、2006)

長編第一作の冒頭で、読者の目に飛びこむのは、真上から見下ろした都市の姿である。主人公ピンの根城ともいえる旧市街は、まっすぐにおりて来る陽の光によって、上から下へと「垂直に」記述される。たしかにいま目にしている風景を水平方向に記述することは考えられない。「垂直の風景」——作品をくりかえし読んでも今ひとつ確かな実感の得られなかった情景を、まがりなりにも肌で感じ、自分なりに理解できた瞬間だった。「上から見た」サンレモの姿はいわば「原風景」として機能する。晩年のあるインタビュー（聞き手はマリア・コルティ **Maria Corti**）でカルヴィーノは語っていた。サンレモのイメージがほぼ40年間たえず作品の中に現れつづけ、しかもそのほとんどが「上から見下ろした」都市のイメージであると。

複雑に入り組んだ路地を登りつづけ、「松かさ」のてっぺんにたどりつくと、そこにひっそりと教会が建っている。ここから、眼下の旧市街を見下ろすことも、海岸線を含むサンレモの全景を見晴らすこともできる。さらに山手に向けて足を伸ばせば、カルヴィーノ家の農場があったサン・ジョヴァンニへと至るのだが、日が暮れ雨もふたたび降り出してきたので、この日のサンレモ探訪は打ち切ることにした。

### 3、トリノ市立中央図書館

当初は、トリノ国立図書館 **Biblioteca Nazionale di Torino** を資料収集の拠点とするつもりだった。イタリアへ出発する前に資料をリストアップしたところ、約8割がこちらの図書館に存在しており、効率的な調査が期待できたからである。ところが実際に訪ねてみると、資料の複写は館内では一切禁止、図書館の近辺にはコピー機を利用できる施設もないという事実が判明した。そこで急遽、資料の複写が可能な図書館を市内で探すことになり、トリノ市立中央図書館 **Biblioteca Civica Centrale di Torino** を紹介された。さっそくおとずれてみると、所蔵目録の点数こそ国立図書館に及ばぬものの、近年の文献であれば複写が可能（その都度、申請書を書く必要もない）、マイクロフィルムのデータ（古い新聞、雑誌など）が質・量ともに充実、開館時間も比較的長い、などさまざまな利点があることがわかり、けっきょくこちらの図書館で資料収集をつづけることにした。延べ5日間の調査の結果、カルヴィーノのインタビュー27点、学術論文など35点を入手することができた。マイクロフィルム資料、個人による複写が認められない大型の資料に関しては、トリノ在

住の知人に依頼し、後日できあがるコピーを日本に郵送してもらうことにした。

また資料調査の合間に、ジョヴァンニ・パヴァレッリ Giovanni Pavarelli 教授（トリノ大学、経済史）を紹介され、同教授からカルヴィーノとエイナウディ出版との関係について貴重な助言を得ることができた。エイナウディは戦後のイタリア文化を牽引したイタリア有数の出版社で、トリノ市内に本拠を構えている。パヴァレッリ教授によれば、本社には充実した資料館があり、そこには同社の編集顧問であったカルヴィーノが認めた 4700 通の書簡の写しが保管されているという。晩年のインタビューで告白しているように、カルヴィーノは生涯、自分の本よりも「他人の本」を出すことにより多くの時間と労力を捧げつづけた。その意味で彼は、作家であると同じくらい（あるいはそれ以上に）編集者・批評家として、戦後のイタリア文化に貢献したといえるかもしれない。パヴァレッリ教授には、カルヴィーノの編集者としての側面をくわしく論じた先駆的研究として、ジャン・カルロ・フェッレッティ Gian Carlo Ferretti の *Le capre di Bikini: Calvino giornalista e saggista, 1945-1985* (Editori Riuniti, Roma 1989) を勧められた。エイナウディ社の資料館を教授の案内で訪ねる計画もあったのだが、市立図書館における資料調査を優先するため、やむをえず今回はお断りすることにした。

#### (4) 学術調査の結果およびそれに基づく考察など

今後の研究を進めるうえで必要な文献を数多く入手できたことは、なんといっても今回の学術調査のおおきな成果である。モンドドーリ版の『カルヴィーノ全集』に収録されていない資料（おもに作家本人へのインタビュー）、都市論的観点を含むさまざまな学術文献など、いずれも博士論文を執筆するうえで不可欠の参照項となるだろう。

書誌調査ならびに実地調査をおこなった結果、サンレモという都市空間が作家におよぼした影響として、風景の「垂直性」というテーマを考察する必然性を強く感じた。カルヴィーノの作品に（サンレモを彷彿させる）「上から見た」都市がくり返し現れることは、すでに述べたとおりである。今後は、この「垂直性」という手がかりを、空間論的なテーマにかぎらず、時間論的あるいは認識論的テーマにまで適用することで、カルヴィーノ文学の本質を捉えることにしたい。たとえば『見えない都市』のような作品には、一本の川の流れにも似た「水平な」時間とは異なる、「垂直の時間」（G.バシュラール）あるいは「垂直の歴史」（M.メルロ＝ポンティ）とでも呼ぶべき時間イメージがあるのではないか。これは

まだ仮説にとどまるが、カルヴィーノが用いる「考古学」と「地図」の概念こそこの問題を解く鍵となるのではないかと考えられる（考古学者と地図制作者はいずれも大地を垂直に見下ろすまなざしを持つゆえに）。

今回の学術調査では、カルヴィーノが残した資料約 40 点と、その他の学術文献約 50 点を収集することができた。そのうち現在の関心と結びつく資料を中心に、具体的な考察とともに、以下に報告する。

◇カルヴィーノが残した資料（おもに『全集』未収録のインタビュー）

● *E al loro posto chi verrà?*, in “L’Espresso”, 30 aprile 1972

現代社会における「民話」のありかたをテーマとする討論。カルヴィーノは、愛娘ジョヴァンナが日頃どんな読書をしているかを引き合いに出し、子供が民話を読む必要性について報告している。発言者は他に R.アルキント、G.マンガネッリ、N.ギンズブルグ。

● *Nel regno di Calvinia*, in “L’Espresso”, 5 novembre 1972

『見えない都市』の刊行にあわせ、週刊誌「レスプレッソ」に掲載された記事。小説の重要な部分の抜粋と、カルヴィーノへのインタビューの 2 部構成になっている。聞き手の名前は記されていないが、インタビュー自体がおそらくカルヴィーノの創作であると推察される。『見えない都市』の制作過程について知るうえで必要不可欠の文献である。彫刻家ファウスト・メロッティの作品から受けた視覚的インスピレーションが認識の「垂直性」にかかわる点、また自作についての論評が「建築」と「地図制作」の語彙でなされている点も興味ぶかい。

● *Intervista di Bernaldo Valli*, in “La Repubblica” 14 dicembre 1977

● *Intervista di Bernaldo Valli*, in “La Repubblica” 29-30 gennaio 1978

同一の聞き手が異なる 2 つのテーマについておこなったインタビュー。前者はスターリン主義とイタリア共産党について、後者はフランスの作家ジュール・ヴェルヌについて答えている。

● *Intervista di Enrico Filippini*, in “La Repubblica” 18 aprile 1978

ヴォルテールとルソーそれぞれの文学観を合わせ鏡のように論じている。小説『木のぼり男爵』（1957）と 18 世紀啓蒙主義の関係について考えるヒントになる。

● *Intervista di S. Vertone*, in “Nuovasocietà”, 1 maggio 1978

いわゆるモロ事件のさなかに発表されたインタビュー。テロリズムの時代における知識人のありかたについて述べている。

● **Intervista di Bernardo Valli, in “La Repubblica” 19 giugno 1979**

『冬の夜一人の旅人が』の刊行にあわせ、日刊紙「ラ・レプブリカ」に掲載されたインタビュー。小説の真の主人公といえるルドミッラの造形に関するコメントは、「もの」と人間の係わりについて考えるうえで興味ぶかい。

● **Intervista di Marco d'Eramo, in “Mondoperaio”, XXXII, 6, 1979**

作家カルヴィーノの全体像を知るうえで重要なインタビュー。先行世代の作家たち（ヴィットリーニ、パヴェーゼ、モンターレ）とのつながりから、イタリア共産党に対する評価、読者論、幻想文学論まで、多種多様なテーマについてくわしく述べている。「モンターレの本を通してリグリアのわたしの風景を読むことを習った。わたしにとってはかれの精神のありようが殊の外たいせつだった」というくだりは同郷の詩人との影響関係について考えるうえで貴重な証言である。

● **Intervista di Francesca Salvemini, in “Lotta continua”, 19 luglio 1979**

質問がレイモン・クノーの『青い花』や漫画のドナルドダックの台詞から引用されるなど、聞き手が趣向をこらした異色のインタビュー。ボルヘスの短篇（「アル・ムターシムを求めて」と『ドン・キホーテ』の著者、ピエール・メナール）について論じるくだりは、しばしば比較される両者の関係について考えるうえで重要な資料といえる。

● **Intervista di Nico Orengo, in “Tuttolibri”, 28 luglio 1979**

『冬の夜一人の旅人が』の刊行から約一ヶ月後に発表されたインタビュー。作品の理論的側面しか捉えようとしない批評家たちに対する、カルヴィーノのささやかな異議申し立てとして読める。「この本のテーマは、記号論でも物語論でもなく、小説を読む喜びなのです」とカルヴィーノは述べている。有名な台詞「ルドミッラはわたしだ」もこのインタビューの中にある。

● **Nella bottiglia del diavolo, in “La Repubblica”, 12 maggio 1981**

ごく短い批評でありながら、カルヴィーノの詩学の核心にふれる重要文献といえる。19世紀の「幻想文学」を「視覚」という観点から読み直すもっとも早い試みのひとつである。ここで理論化されている「見えないもの」l'invisibile というテーマについては、『アメリカ講義録』*Lezioni americane* (1988)の第4章「視覚性」、またカルヴィーノ編『19



世紀幻想短篇集』*Racconti fantastici dell'Ottocento* (Mondadori 1983)の序文と照らし合わせて考察してゆきたい。

● **Intervista di Sandra Patrignani, in *Fantasia & Fantastico*, Camunia, Milano 1985**

「幻想」や「想像力」をテーマとする対談。カルヴィーノと聞き手の Patrignani との間で「幻想」という概念についての理解が異なるためか、両者の対話はじゅうぶんに噛みあっているとはいいがたい。とはいえ、たとえばカルヴィーノの少年時代における民話の創作など、興味ぶかいエピソードが随所に見られる。ダンテの『煉獄篇』の第17歌の引用に明らかなように、『アメリカ講義録』の第4章「視覚性」の内容と部分的に対応している。

◇都市論的観点を含む学術文献

● **Giorgio Bertone, *Letteratura e paesaggio: Liguri o no*, Piero Manni, Firenze 2001**

「文学と風景」という共通の主題にもとづく9篇の批評を収める論文集。著者の Bertone はリグリア出身の文献学者で、すぐれたカルヴィーノ論(*Italo Calvino: Il castello della scrittura*, Einaudi, Torino 1994)を書いてもいる。本書の骨子といえる第1章「リグリア文学と風景」*La letteratura ligure e il paesaggio*は、20世紀イタリア文学における「リグリア」というトポスの特異性を知るうえで貴重な導きとなる。とくに、風景描写の「垂直性」を20世紀リグリア詩人(たとえばモンターレとズバルバロ)の特質として論じる箇所は、カルヴィーノがモンターレから被った影響を具体的に考えるうえでの指針をあたえてくれた。カルヴィーノの風景描写の「垂直性」を見抜いたドメニコ・スカルパ(Domenico Scarpa, *Italo Calvino*, Bruno Mondadori, Milano 1999)、シルヴィオ・ペッレラ(Silvio Perrella, *Calvino*, Editori Laterza, Roma-Bari 1999)の研究とともに、欠かせない参照項となるだろう。

● ***Le città visibili*, a cura di Roberto Lumley e John Foot, Il Saggiatore, Milano 2007**

2004年に英国で出版された論文集のイタリア語訳。戦後イタリアの都市空間の変遷について、さまざまな領域の研究者がそれぞれの観点から論じている。Claudia Nocentiniの論考「トリノのカルヴィーノ：書くことと編集すること」*Calvino a Torino: La scrittura e l'attività editoriale*を収録している。トリノという都会が若きカルヴィーノを魅きつけたさまざまな要素(エイナウディ出版、労働運動、都市問題)に言及しつつ、彼の作家・

編集者としての活動を戦後トリノ文化史という文脈に位置づけている。

- Claudia Nocentini, *Italo Calvino and the Landscape of Childhood*, Northern Universities Press, 2000

Claudia Nocentini の主要論文。サンレモの風景を構成する 3 要素（海、都市、丘）を、作品に見られる自伝的要素とからめつつ、詳細に分析している。サンレモのイメージの反復と展開を、明確な時代区分の導入とともに、丁寧にあとづけようとしている労作。40 年代から 70 年代に書かれたカルヴィーノ作品をほぼすべて考察の対象としている。カルヴィーノ文学とサンレモ（あるいはリグーリア）という主題に関するかぎり、これまでに書かれたもっとも網羅的な論文のひとつであろう。

- Gianni Puglisi e Paolo Proietti, *Le città di carta*, Sellerio editore, Palermo 2002

20 世紀イタリア文学における「都市」というテーマの展開について知るうえで格好の入門書。一例を挙げると、パゾリーニとローマ、シャッシャとパレルモ、マレルバとパルマなど、これらの詩人や作家が如何なる戦略のもと都市空間を言語的に表現したか、その要点を手際よくまとめている。カルヴィーノについては、『マルコヴァルド』と『見えない都市』に言及しつつ、作品の中の都市と作品の外に存在する都市（現実のサンレモやトリノ）との関係について考察している。カルヴィーノが「見えない都市」という概念で言わんとするところを、適切な引用とともに簡潔に説明している点も、たいへん参考になる。

- Françoise Choay, *La città. Utopia e realtà*, Einaudi, Torino 2003

- Leonardo Benevolo, *Le origini dell'urbanistica moderna*, Laterza, Roma-Bari, 2001

- Carlo Aymonino, *Origini e sviluppo della città moderna*, Marsilio, Padova 1971

シャルル・フーリエ論「欲望の制御装置」*L'ordinatore dei desideri* (1971)の中で、ヴァルター・ベンヤミンのフーリエ論とともに、カルヴィーノが言及している 3 冊。いずれの著者もフーリエら 19 世紀ユートピアン都市論的想像力を近代都市計画の起源に据えている点が興味ぶかい。小説『見えない都市』(1972)の思想に都市論や建築論が重要な役割を果たしていることの直接的な証拠でもある。1970 年前後の都市論と文学の結節点をさぐるうえで、またフーリエの著作が『見えない都市』におよぼした思想的影響を考えるうえで、多くの示唆をあたえてくれるはずである。

- *Storia della Liguria*, a cura di G. Assereto e M. Doria, Laterza, Roma-Bari 2007

リグリア史に関する最新の論文集。1950年代にはじまる「観光ブーム」と「建築投機」について、その時代背景を統計的なデータとともに知ることができる。小説『遠ざかる家』(1957)を同時代的文脈に位置づけるうえで有益な資料となるはずである。

◇その他の資料

● Ernesto Ferrero, *I migliori anni della nostra vita*, Feltrinelli, Milano 2005

エイナウディ出版周辺で活動した戦後の文化人たちをめぐる回想録。著者のフェッレロは『アルバム・カルヴィーノ』の編者の一人であり、エイナウディ出版におけるカルヴィーノの同僚でもあった。カルヴィーノをめぐる知られざる逸話から、カルヴィーノが著者に語った言葉まで、興味ぶかい記述が多数ある。編集者カルヴィーノの仕事を間近で目撃した人物にしか書けないドキュメンタリーである。

(5) 調査地・文書館建物などの写真

サンレモの旧市街

